AIM2018事業領域の11ドメイン

今回の主なトピックス

秋田指月が品質マネジメントの国際規格を取得

秋田指月が国際規格「ISO/TS16949」を取得しました。国内･海外を問わず、拡大していく電気自動車市場に向け、その確かな品質をもって、積極的に拡販してまいります。

高校生インターンシップの実施

2016年10月、3日間のインターンシップを実施。今後もこのような取り組みを通して、地域や社会への貢献に努めてまいります。

→ 詳しくはP7-P8をご覧ください

事業セグメント
●コンデンサ･モジュール ●電力機器システム
●情報機器システム

電気をマネジメントするさまざまな商品を開発･生産して、お客様に提供し、社会に貢献する。

指月総合マネジメントシステム
∫IΣS（シムス）

社員一人ひとりが「品質･コスト･納期」という経済的視点や、「再利用･負荷の減少･エネルギーの再生」という環境的視点を持ち、業務に取り組む。

将来への種をまきながら、目の前の収穫を、より確実なものに。

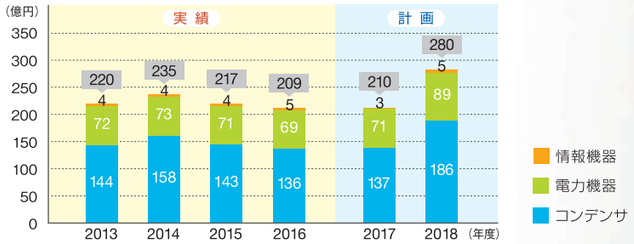
円安から円高へと揺れ動く為替や、英国のEU離脱問題、アジア経済の減速など、依然として先行き不透明な状況がつづくなか、シヅキでは、受注･売上の確保、収益改善に向けた活動に努めてまいりました。しかし、結果として第89期は2期連続の減収･減益となりました。

私たちは今期、自動車用コンデンサの需要拡大を見据えた「岡山指月の第3工場新設」や、2016年10月に立ち上げた村田製作所との合弁会社による新素材開発など、将来の大きな収穫に向けた種まきを進めてまいりました。その一方で、市場の変化によって、今期に収穫を見込んでいた受注のいくつかを逸してしまったことが、減収･減益という結果につながったと考えております。

近年、外的環境の変化は、ますます速さと激しさを増しています。たとえば、この数年好況がつづいていた産業用インバータ向けのコンデンサの需要が、突如減少に転じました。これまで順調に増産を重ねてきただけに、その予測は困難でした。そんななか、たとえ外的な環境に変化が生じても、スピードを伴った対応でそれをカバーしていけるような、しなやかな体制づくりが求められています。シヅキのものづくりを担う現場。その対応力の強化を、今私たちが取り組むべき大きな課題のひとつであると捉え、改善を進めてまいります。

代表執行役社長 伊藤 薫

中長期経営計画 AIM2018 売上高実績と計画



「スピード」と「経営参画意識」。足もとから現場を見直し、強い組織をつくる

時期尚早な増設を、教訓として生かす。発想を転換し、スピードを強化。

将来の収益拡大に向けて種をまきながらも、現在目の前にある収穫のチャンスを、しっかりと刈り取っていく。そんな体制をつくるためには、環境の変化に素早く適応できるスピードが必要だと考えます。

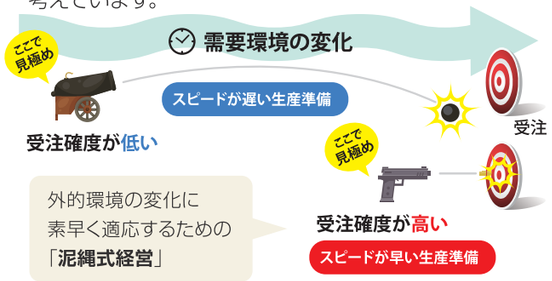
“泥棒を捕らえて縄を綯う”という諺（ことわざ）があります。泥棒を捕まえてから慌てて縄を準備しても、泥棒は逃げてしまう。事が起きてから慌てて準備を始めても遅いということの例えとして、よく使われる言葉です。

しかし、発想を変えてみると、泥棒が来ないのに縄を用意していては、その縄（準備）が無駄になってしまう可能性もあるわけです。私たちも受注拡大を見込んで早めに設備増強をしたところ需要環境が変化し、増強した設備を遊ばせてしまうという経験をしました。縄が必要になるのは泥棒を捕まえた時であり、ジャストインタイム（JIT）の経営思想を疎かにして早過ぎる準備をしたことを反省しなければなりません。

無駄を出さず、機会損失を出さず。スピードが生むのは、精度の高い経営判断。

しかし、泥棒がいつ来るのかを前もって知ることができないように、環境の変化を予測するのは難しいものです。では、どうすればよいのでしょうか。私は、“縄を綯うスピードを極限まで高めること”しかないと考えています。これまで1年かかっていた準備期間を半年、3ヶ月と縮めていく。すると、縄（設備）が必要かどうかの見極めを間際まで引きつけて、より精度の高い判断を下せるようになります。

新たな受注の機を捉えつつ、その準備を損失にすることなく、遅すぎて機会損失に悔やむことのないように供給体制を構える。そんな「泥縄式経営」が、外的環境の変化に素早く適応するための理想型ではないかと考えています。



現場の改善と経営参画意識につながる、「小集団活動」をスタート。

さらに、シヅキでは、2016年から新たに始めた取り組みによって、現場レベルでの自主改善が進みつつあります。社内で「小集団活動」と呼んでいるその活動は、各拠点の社員たちが10名1組の少人数グループに分かれ、生産性を高めるための案や、職場の環境をより良くするための意見を出し合い、それを実行に移していくものです。定期的に拠点大会や全社大会を開いて発表を行い、優れた取り組みを評価するとともに、その成功事例を社内に共有していきます。

少人数グループのなかでは、社員一人の意見が相対的に大きくなるため、一人ひとりの経営参画への意識が高まっていくことを期待しています。第一回目の全国大会では、ユニークな発表や、ふだん顔を合わせることのない社員同士の交流が生まれ、現場の空気もより明るく前向きなものに変わりつつある兆しを感じています。

社員一人ひとりが経営的な視点から改善を行い、スピードと柔軟な対応力を備えた現場をつくり上げていく。より強力な組織をつくりあげ、その土壌の上に今期まいてきた種が育ち、実を結んでいくことで、大きな成果を生み出していきたいと考えております。株主の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

将来の収穫に向けて、育ちつつある種

- 岡山指月の第3工場が今年7月に稼働。自動車用コンデンサの生産増強へ
- 合弁会社による、村田製作所との共同開発が順調に進行中。